

---

# 村おこしな勇者は闇の女神をお供に 1 2 の魔王を倒す旅に出る

ブッチャー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

村おこしな勇者は闇の女神をお供に12の魔王を倒す旅に出る

### 【Nコード】

N4108U

### 【作者名】

ブツチャー

### 【あらすじ】

ラスボスより強い女神と旅する異世界召喚ファンタジー。タイトルが全て

## プロローグ

村おこしをしよう。タラバ大陸の西、イクラ島にあるマスオ村の村長ガルドは、朝起きた時に何となくそう思った

ガルドは今年80になる高齢。最近ポケが始まっていて、隣に住むエルラさん（22歳無職）を自分の嫁だと言い張り、村の人間からもうそろそろ危ないかもね、なんて噂されているクレイジー爺さんである。

だから、そのガルドが村人を集会場に集め、村おこしをすると発表しても村人の反応は鈍かった

「村長、村おこしってたつてどうするんだよ。こんな寂れた島の寂れた村にわざわざ来る観光客なんて居ないだろ」

この島、イクラ島は総人口422人ほどの小さな島。その島にある村の一つ、マスオ村には45人しか住民は居ない。そして名物も名所も有名人もない。

唯一釣りの名所ではあるが、一番近い大陸から船で五時間も掛かるこの島へ、釣りに来る物好きもそうは居ない。はつきり言うつと、孤島なのである

「だから村おこしなのじゃ。なに、わしに一つ良い考えがある」

村長は胡散臭さげな村人の顔をゆっくりと見回し、ちょっと和ませてやるつと最近覚えた萌え系つぽく叫んだ

「勇者をこの村から輩出するんだにゃん！」

三年前に突如現れた十二体の魔王。そのお陰で世間は勇者ブームとなっている。

それは社会現象にもなっていて、特に去年歌手デビューした五人組の勇者グループ、勇者時代は売れに売れた。

それにあやかっつて一儲けしようと考えている村長の姑息で浅はかな考えに、村人達はため息をつく

「くだらない。真面目に聞いて損したわ」

村で一番若く、日に焼けた褐色の肌と巨乳がエロいエルラは、壇上の村長を睨み、苛立ちを隠さず言った

「勇者は優れた知性、身体能力、実績、名声、カリスマ、そして財産が無いと登録も出来ないわ。この村にそんな人がいるかしら？」

エルラが村人を見回すと、村人達は一様に視線を逸らす

「みんな今日を生きるのが精一杯の人達。勇者なんてやってる場合じゃないのよ」

「……だな。そんな奴、いねえ」

そつだ、そつだ。そんな奴はいない！ さつさと死ぬ、ジジイ！！

村人達は村長の軽はずみな発言に怒りを表す。どさくさに紛れて物騒な事を言う村人も居たが、村長は気にせず、次の言葉を言った

「村に居ないのなら別の場所から喚べば良い。強く逞しく、わしらに従順な奴隷の様な勇者をの」

この物語の主人公、御剣 仁は、とにかくついてない少年だった。町を歩けば歩道に突っ込んで来た車にぶつかると、ロト6を買ってみたら数字が一つずつズレているし、バスに乗ったらバスジャックされる。とにかく100年に一度、誕生するかしないかわからない不幸少年だった。そしてやはり今日もついてなかった

「あいたたた」

「だ、大丈夫、仁？」

「あ、ああ。へーき、へーき」

仁は自分の後頭部に飛んで来た野球ボールを拾い、振り返る

「すいませーん、ボール投げて下さーい」

ボールが飛んで来たのは、さっき通り過ぎた空き地。そこで小学校高学年だと思われる少年二人が、手を振っていた

「くら！ あんた達ねえ！！」

少年達に憤り、文句を言いそうな幼なじみを、仁はまあまあとないで、少年達にボールを投げ返してやる

「ありがとございま〜す」

一切悪ぶれてない態度だが、それでも仁はどう致しましてと手を振り返して笑った

「ちよつと、仁！」

「俺なら大丈夫だから、琴音」

にこつと笑う仁。この笑顔に琴音は、最近とても弱い。

それは仁が、整った顔立ちをしているからだとか、とろけそうなほど優しく笑うからだと言った理由では無いのだが、琴音自身も何で仁の笑顔を見ていると、こんなに恥ずかしくなるのか分かっていない。

子供の頃は、こんな事無かったのに。琴音は仁から顔を逸らし、息を軽く吸って呼吸を整えてから続きを言う

「……あ〜ゆ〜のはきちんと怒らないと駄目なんだからね。悪い事をしたら大人に怒られる、それが当たり前なんだから」

「そうだね。ごめん、琴音。なんか慣れっこになっちゃってさ」

仁は頭をさすりながら苦笑いをする。そんな仁を見て、琴音は諦めた様に溜息を付き、下校を再開した

「とにかく、帰ったら仁の家に行くから。直ぐに頭見せてね」

「ああ。頼むよ、琴音」

ほんとしょうがないなあ。そんな気持ちで、幼稚園からの幼なじみを見る琴音の顔は、仁に負けなくらい優しい微笑みを浮かべていた

海辺に近い村であるマスオ村。村を東に出て、小高い丘を上ると、人間大の薄汚れた女像がある。その像の脇には、女神ちゃんお休み中と書かれた板の立て札が刺してあり、お供え物らしき饅頭や花が飾られていた

「村長、女神ちゃん像の前に来て何すんだ？」

ついて来ないと村長、ここでウンコしちゃうからね！ と拗ねたポケジジイに仕方がなくついて来た村人達は、訝しげに村長へ尋ねる

「女神ちゃんを起こすのじゃ」

はあ？ 何言ってるんだ？ やっぱりポケたんだ

女神像を布で一生懸命拭いている村長を見て、村人達は憐れみの視線を送った

「女神ちゃん様、女神ちゃん様、お目覚め下さいませ。女神ちゃん様、女神ちゃん様、どうかお願いします」

ブツブツ呟く村長の姿は、もう憐れを通り越して、キモかった

「……もう良いわ、村長。貴方は頑張ったわ」

村長からストーカー被害に遭っているエルラが珍しく優しく声を

掛けると、村長はエロいだけの女は黙って俺に股開いていれば良いんだよ、俺に意見するなクソビッチがと閨白宣言をする

「死ね」

エルラのしなかやで長い足が、像をフキフキしていた村長の後頭部に突き刺さる。惚れ惚れするくらい良い蹴りだ

「げぎや!?!」

カエルが潰れたような音と共に、女神像に朱い花が咲く。綺麗ね、お前の方が綺麗さなんてほのぼのした会話を村人達はし、そろそろ解散かとの流れになった時、それは起こった

「ん? うわあ!?!」

女神像全体から、黒い物が湧き出たのだ。それは影のようであり、闇そのもののような、まがまがしさを持っている

「な、なんだこれは! ひいい!?!」

大気に広がる闇に、村人達は恐れ、一斉に逃げ出す。そんな中、瀕死の村長とエルラだけは逃げ遅れていた

「全く! 世話が焼けるジジイね!?!」

エルラは村長を担ぎ、急いで逃げ出す。しかし闇の広がり早く、エルラの足は闇に捕われてしまった

「ひっ!?!」

ぬめつとした感触に、エルラは短い悲鳴を上げる。そして、闇はエルラ達を覆いかぶさる様に広がる

「い、いやぁ……」

こんなジジイと死ぬのは嫌だ。こんな事なら村を出て、踊り子としてでも働けば良かった。後悔の中、エルラは眼をつぶり、助けを呼んだ

「た、助けて、助けて勇者様ー！」

「……………え？ ん、怖がらせちゃった？ ごめんごめん」

エルラの叫びに、間の抜けた声が返って来る。その声に恐る恐る眼を開くと、女神像の代わりに一人の女が立っていた。その女を見て、エルラは息を失う

「あ……………」

エルラが今まで見たことも無い銀色の髪は、星でもちりばめたのかキラキラと輝き、漆黒の装衣で隠したその白肌の清純さは、触れる事もためらう程。顔立ち？ それは美しいさ。それ以外にどう表現しろと言うのだ、まるで現実感が無い夢のような存在。

そして何よりも強く感じるのは、神聖さだ。学の無いエルラですら、圧倒される。これは人と言うより……

「貴女は……………なに？」

一言で言えば花。そこにただあるだけで、人を魅了し、狂わせる

極上の花。だがそれは摘む事を許されない神々しさを持つ

「なにつて……………女神ちゃん？」

「め、女神ちゃん様！」

「きゃあ！？」

エルラの背で気を失っていたガルドがいきなり叫び、女神と呼ばれた女へ平伏す。イツツ・ドゲザと呼ばれる体勢だ

「あれ？もしかしてガルドちゃん？老けたわね」

「女神ちゃん様はお変わりなく」

「そりゃ女神ですから。で、何かな用事は？」

「は、はい。ええと、その……………」

ガルドは言い淀む。流石に村おこしの為、勇者を召喚してくれとは言いつらい

「ん？あれ？この雰囲気……………もしかして、魔王出現しちゃってる？」

「え？あ、はい。三年前、大陸のあちこちに突如12体の魔王が出現しまして……………」

お陰で勇者ブームでございます。ガルドはその言葉を飲み込み、女神の反応を伺った

「あちゃ、困ったなあ。助けてあげたいけど、神様はあくまでも観測者で人間界に余り関わっちゃいけないってルールがあるから……武器あげようか？ 凄いい奴」

そう言っただけで女神は片手を上げる。その手に闇が集まり、闇は一つの形を作り出す。それは青白い炎を纏った、シンプルな形の槍だった

「どう、これ？ まともに刺されれば魔王でも風穴あくよ？ ガルドちゃん倒しに行ってくれば？」

「あ、ありがとうございます。で、でもわしはもう歳ですし……出来れば武器じゃなく勇者を一匹欲しいかな……なんて」

「勇者？ 勇者かあ。それって私に召喚しろって事？」

機嫌を損ねたのか、女神はガルドに問いただすように尋ねた

「え！？ あ、そ、そのこ、このエルラがそう言いました！」

「な！？ こ、このジジイ……！」

「ぐ、ぐええ！」

エルラが村長の首を絞める中、女神は思案する。どうしたものかと

「……そうねえ。魔王が出たんなら、そのくらい良いでしょう」

「え？」

女神の言葉に、エルラは手を離す。後一步でジジイを天に還す事が出来たのだが……

「ぶふ！ ゴホゴホ！ ふうふう……ほ、本当ですか女神ちゃん様？」

「ほんとほんと。じゃ強い子、召喚しないとね。どの世界の子にしようかな」

世界は三つの異空間に別れている。この世界は出現した順番で言うと一番目、モンスターと人間が争う弱肉強食の世界である。仁が住むのは三番目、この星を地球と呼んでいる世界だ。

一つの世界には一番少ない所ですら20億の人間が住み、多い所では60億の人間が住む。その中から女神に選ばれたたった一人の人間は、果たして超絶な幸運なのかド不幸なのか

「ん！ あの子にしょ！ 可愛いし」

まあ、不幸だわな

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4108u/>

---

村おこしな勇者は闇の女神をお供に12の魔王を倒す旅に出る

2011年10月5日20時04分発行